

〈野宮〉の能絵から

——奈良大学図書館「能絵」と

国立能楽堂狩野柳雪筆「能之図」——

三宅晶子

六代將軍家宣周辺で作成されたらしい三本の「能絵鑑」（国立能楽堂・宇和島伊達文化保存会・法政大学能楽研究所蔵）は、人物も作り物も折り目正しくしっかり描かれており、多彩な技法を駆使した絢爛豪華な作品集である。それとは別系統（「非能絵鑑系」と仮称）の、

しかし一つのグループに括ることが出来るような能絵の一群がある。その中心的存在が、狩野柳雪筆「能之図」（国立能楽堂蔵2006、「柳雪本」と仮称）で、上下二巻各30曲ずつの能絵が収められている。これと同じ絵柄を収めたものとしては「能楽図帖」（国立能楽堂蔵2008「図帖」と仮称）が知られている。24図中12図が柳雪本と共通する。この図帖は江戸初期成立、現状は折本になっているが、「もとは屏風に貼り交ぜられていたものか」とされている¹⁾。江戸中期以降、卷子本や画帖の形で手軽に扱える能絵集が複数出回り、富裕層の間で、その需要が高まっていたのであろうと推測されるが、それらに比して格段に古いものである。

令和四年度に奈良大学図書館蔵となった「能絵」23枚（奈良大本と仮称）は、その図帖と関連の深い能絵集である。図帖とは（小塩）1曲が一致、柳雪本とは9曲の絵柄が一致する。奈良大本の出現によって、狩野柳雪が参照した非能絵鑑系の能絵群が存在していたことが、より確実になったではなかるうか。

図帖と奈良大本では、色々な点で似た傾向が見られる。まず背景が茶色に変色している点で、両者とも何かを塗っているのかと思えるほどだが、屏風に貼付された状態で長期間放置されていたとすれば、これほどの変色もあり得るのだろう。絵はシテを中心に印象的な型どころが描かれており、ワキが対座している場合もあるが、シテ一人の時もある。作り物は必要な場合だけ簡略に描かれる。

狩野柳雪（正保四1653年～正徳二1712年）が描いている絵と比べて、奈良大本はかなり古そうという印象はあるものの、氏索性も伝来もわからない、扱いの難しい資料である。その奈良大本が、柳雪本に先行するだろう



写真1：奈良大学図書館「能絵」〈野宮〉

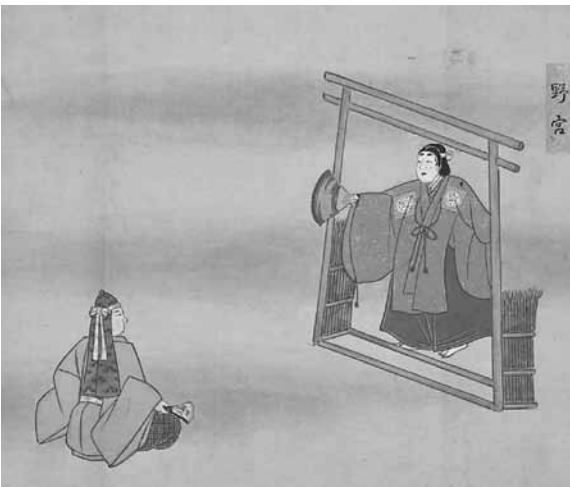


写真2：国立能楽堂 狩野柳雪筆『能之図』〈野宮〉



写真3：国立能楽堂『能楽手鑑』〈野宮〉

と考える一番の根拠となる絵が〈野宮〉である。「内外の鳥居に、出で入る姿は」の場面が描かれている。奈良大本(写真1)では扇を鳥居の外に出し、鳥居の境界線ギリギリの中に左足を着き、右足を軽く上げて外に踏み出そうとする瞬間が描かれている。この同じ絵柄が柳雪本(写真2)にもあるが、こちらはワキも描かれるのみならず、注目したいのは作り物の向こう側に両足で立っていて、右手の扇だけを鳥居の外に出している点である。鳥居の奥行きが狭すぎて倒れそうだし、何をやっている場面なのか、よくわからずに描いているに違いない。奈良大本では「出で入る姿」であることが、絵を見るだけでわかるのだが、柳雪本ではわからない。奈良大本の方が正確に描写していることは確実で、これがオリジナル



写真4：神戸女子大学図書館『能狂言絵巻』〈野宮〉

というつもりはないが、柳雪本よりも原本に近い絵なのではないだろうか。この場面は他にも類絵が多く存在する。国立能楽堂『能楽手鑑』(BK094-005 写真3)は柳雪本と同じようなポーズだが、鳥居は奥行きがたくさん取ってあって、これも現実的には無理な姿勢をしている。神戸女子大学図書館『能狂言絵巻』(721-2-37 写真4)は、能研本『能絵鑑』(写真5)と、装束は異なるのだが、立ち姿が似ている。ただし小柴垣のしつらえが、能研本ではよく見かける作り物の絵と共通している(国立能楽堂『能装図』BK018-097 写真7など)のに対して、こちらは奈良大本系の形である。この作り物は能絵鑑系のものには見当たらない不思議な形をしている。参考として国立本『能絵鑑』(写真6)も掲載したが、こちらは少し前の「誰松虫

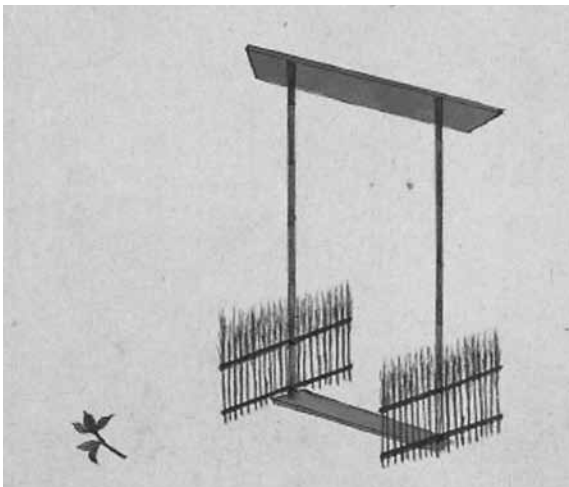


写真7：国立能楽堂『能装図』〈野宮〉

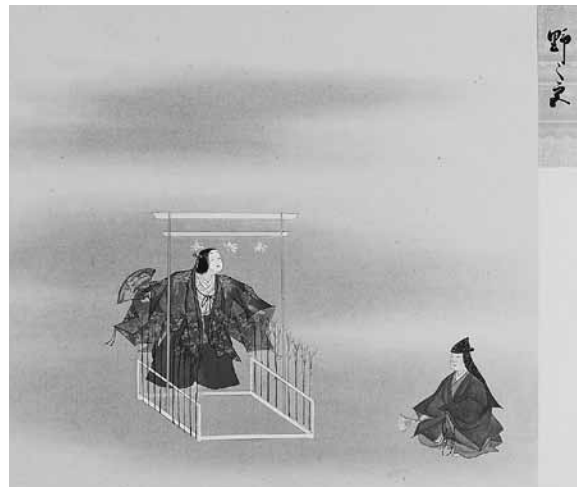


写真5：法政大学能楽研究所『御能絵鑑』〈野宮〉

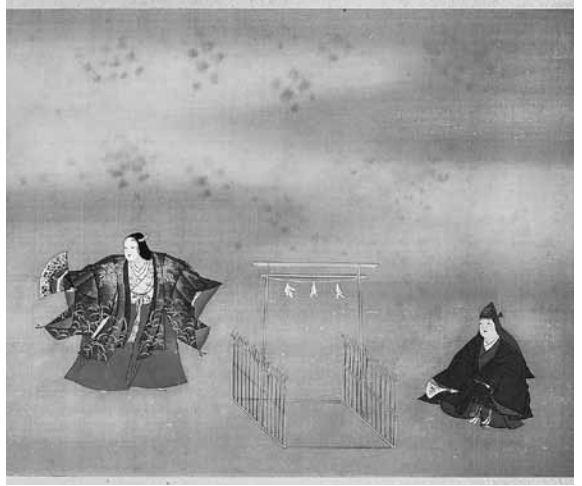


写真6：国立能楽堂『能絵鑑』（野宮）

の……」の場面を描いている。作り物、装束、ワキの姿は能研本と共通する。

〔野宮〕は能絵鑑系・非能絵鑑系で複雑に影響関係が見られ、製作過程で相互に影響関係があるのだろう。そのような中であって、奈良大本の絵はオリジナルに近い力強さがある点注目される。

ところで奈良大学には文化財学科がある。保存科学が専門の魚島純一教授がこの資料に興味を持ってくださり、残存状態に特色のある（海人・采女・狸々・三井寺）について、マイクロスコープ画像撮影・蛍光X線分析・赤外線写真撮影などをして、分析して下さった。その結果を簡単に紹介する。

和紙を使用。題箋と絵の枠には銀紙使用、題箋は黒く変色しており、背景の変色と同じ

外的要因が加えられている。元題箋を貼り直して使用しているらしい。題箋跡は各絵に二つずつ認められ、その部分は比較的白く、元の紙の色味を残している。枠の銀紙は新しく、現状に仕立てる時に枠として新たに加えられたか。穴はパンチなどで開けたものではない。赤外線撮影により、人物など一部の墨線が二重になっている部分が確認できることから、加筆があったとも考えられる。

色料の調査Ⅱ肉眼で金色に見える部分には、金（E）を含む部分と含まない部分が存在する。赤色の色料に鉛（C）を主成分とする鉛丹と思われるものと、水銀（G）を主成分とする辰砂と思われる物が混在する。緑色だったと思われる部分からは銅（E）が検出され、「緑青」などの使用が想像されるが、安定した物質である緑青が現状では緑色を呈していない原因は不明である（何らかの化学反応か）。銅（E）の検出が想像された青色部分から銅が検出されずカルシウム（B）のみが検出されたことから青色部分に使われた色料は染料である可能性がある。

虫損は二種類認められる。複数枚にわたって同じ形で見られる虫損はシバンムシの仲間によるもの。本紙表面が一層剥ぎ取られたような虫損はシミの仲間による。こちらはかなりの紙に見られるが、シミは絵具を嫌うらしく、絵の部分はほとんど損なわれていない。これら二種の虫損は屏風では起こりえないので、台紙に貼られてから被ったものである。以上が魚島先生の分析結果である。岩絵具と水干絵具の併用、複数の加筆など注目すべ

き点が明らかになつたのだが、水干絵具の使用は狩野派ではあり得ないそうで、奈良大本は狩野派の絵ではないと断定できるらしい。両絵具の併用は江戸期の板絵などには見られるが紙の絵には珍しい。とはいえ江戸期には色々な試みがされていたようである。

残念ながらこのような調査分析は、他の能絵では行われていない。図帖などは非やってみたい資料であるが、江戸時代というのは美術史的には時代が下り過ぎ、特別な物以外あまり注目されない。能楽研究上は、江戸期の享受の一端を知る上でも、演技演出上からも重要な資料である。科学的調査をすると色々わかることもあるだろう。協力は惜しまないと魚島先生はおっしゃっていた。

〔注〕

（1）『国立能楽堂収蔵資料図録（1）文献・絵画Ⅰ』（国立能楽堂調査要請課調査資料係編 日本芸術文化振興会 2011）

（2）所収曲目などは「狩野派の能絵二十三枚」『狩野柳雪が参照した能絵たち』（『花もよ』82023.7・692023.9号）で紹介した。『奈良大学紀要第52号』（2024.3予定。奈良大学図書館E）にリポジトリを掲載に内容を紹介する予定である。

※資料の掲載をご許可くださった国立能楽堂・神戸女子大学図書館・法政大学能楽研究所、科学的調査を実施して下さった魚島純一教授に深謝申し上げます。

（奈良大学教授）